



子どもの心の健康講座 ⑧

子どもの精神発達 (2)

前回(6月号)はエリクソンの提唱した発達段階のうち、『乳児期』から『幼児初期』についてお話ししました。今月は引き続き、幼・保育園から小学生ころの『幼児期後期』から『学童期』についてお話しします。

エリクソンは就学前の『幼児期後期』を「遊戯期」と表現しています。

自由な遊びを通じて自分で創造的に何かをやり始め、『幼児期初期』(2歳ごろまで)よりも自分の能力を発揮する範囲を広げていくことで自信をつけていきます。これを「自発性」と表現しています。

遊びには、比較的複雑なおもちゃを使いこなすごっこ遊び、ルールのあるゲームなどがあります。遊びを通じてさまざまなやり方を試し、予想を立て、自分の中に現実社会のルールや人間関係のひな型をつくり、

新たに起こる出来事にも対処できるようになります。

この年代の発達課題である「目的」を持って物事を成し遂げる力をつけます。

この時期は、やってみたことはたくさん出てきますが、自分ではまだまだできないことや失敗すること、もたくさんあります。危険なことや社会的に認められないことをやってしまい、注意や叱責を受けることも多いでしょう。

うまく出来ない時、子どもの心には「うまくできなかった」「周りに認められないことをやってしまった」という罪悪感が生じるとさ

れます。過剰になる

と自信を

損なう

しまう

な

ど問題を

生みます

が、ほど

ほどならば

必要といわれ

ます。



より広い人間関係の中で自発的な経験を重ねて、「やりたいことができた」「計画が予想通りにうまく運んだ」と自信をつけるとバランスのとれた心の発達につながります。

「勤勉性」とは、ある計画立てられた一連の作業や学習の流れを、社会の共通ルールに適応して活動し表現できる感覚を持つことです。

この時期の子ども達は、心の中で周りの大人や、お話の中おの登場人物などを通して人の働く在りようや役割のモデルが作られてきていきます。憧れの人、将来になりたい仕事などがより具体的になってきます。

家庭生活、学校生活、スポーツ、習い事など地域活動の中で周りから評価され、同輩と競い合うことが増え

る時期でもあります。チャレンジして成し遂げる体験をたくさん積むことが大切です。

うまく成し遂げられない時に劣等感と勤勉性が拮抗して表れるとされます。劣等感が過剰な場合は、がむしゃらに競争したり、反対に退行して積極性を失ってしまうこともあり得ます。しかし、かたしほどの劣等感であれば努力の原動力になり、うまくできない他者や弱者を思いやる気持ちの醸成にもつながります。

家族や親戚、近所の人など身近な人との関係も大切な時期なので、困難にあたりうまくできない時に気持ちを止め、具体的に手助けをしてあげると、信頼感を感じ、外界にチャレンジしようという気持ちを保つことができます。

大切な心の発達「勤勉性」と「劣等感」

小学生から中学生ごろの『学童期』では、「勤勉性」と「劣等感」は拮抗するテーマです。

児童精神科医

北畑 歩